

春夏秋冬

台湾徒然



第49回

「春樹」に挑戦二十年

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たち」の聖戦（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）

農業経済！（千葉大園芸学部の大学院にも留学）

「植物がすぎなんです。彼もこだわってますよね」

ぼつりぼつり話していくと、二人には、いろいろ共通点が出てくる。なかでもっとも大切な点は、もともとそれが専攻でも本職でもなかったのに、ともに翻訳の仕事に精魂を傾けていることであろう。

しかも頼さんの場合は、村上作品に特化している。世界でも、その作品をもっともなめるようにして読んで一人である。カタカナを漢字で表現できないことが悔しい、という。しかし「ワタナベ君」の飲む「カフェオレ」には、わざわざ中国語の詳細な注釈をつける。そうした異文化を跨ぐ懇切さが台湾読者の人気を不動のものにしていくのかもしれない。

園芸学部を出た翻訳家・頼明珠はきょうも台北の街を颯爽と闊歩する。

だったことになる。

爆発的なヒットを記録した『ノルウェイの森』が出るのが87年のことで、村上春樹氏は、まだいまほど超メジャーな存在ではなかった。

その彼の作品に目をとめ、以来20年に三十数作品を翻訳してきたという。往時もちろん、「この人」がノーベル賞候補にもなるような作家になろうとは思えない。なにが彼女の琴線に触れたのか。

たとえば彼女はこうしたことを言う。「私は広告の世界で生きていました。コピーをつくっている。簡潔シンプルに表現できる言葉をさがすわけです」

頼さんの触覚がその文体に反応したというのだろうか。村上作品の文体が、実は私は彼の作品を読み通したことが一度もない。家内の本棚にあるので開いては見るのだが、読み続けられない。それを家内は、「カタカナがあ

『1Q84』中国語版が一時、台北の書店に山積みになっていた。上下セットで7000円。日本円に換算すればおよそ20000円だが、アルバイト代7時間分、日刊紙2カ月分にもなる。台湾だけで20万部売れたという。

中華圏での村上ブームについてはいろいろな人が取り上げている。ベルリンの書店にも特設のコーナーがあるというから、いまや世界中に彼の作品の翻訳本があふれているわけだ。実は、世界で最初に村上作品を翻訳したのはひとりの台湾人である。

頼明珠^{ライミンジュ}。1947年生まれながら、とても若々しい。そして、なかなかおしゃべりだ。

彼女が最初に村上作品を翻訳し雑誌に発表したのは、85年のこと。いまのところ地球上のどこからも、「それよりも前に私が翻訳したよ」という声は聞かれないので、頼さんは、世界で最初に春樹を外国語に訳出した開拓者



村上作品の翻訳を続ける頼明珠さん（台北の喫茶「海辺のカフカ」にて）

るからでしょ」という。「名前とか、わざと漢字じゃなくて、カタカナにしている。反漢字ですよ。彼は反日だし、反……」と頼さんの言葉は続く。反××といっても政治的な意味ではない。普通であることに反発する気持ち。自分にも小さい時からそうした反抗心が胸の中に煌々と熾っていたという。

苗栗市の客家の出。大家族と一緒に暮らしていた。きょうだいは8人の7人目。父親は印刷屋を営んでいて、インクの臭いを嗅いで育った。大学は、